

と何らかの関連があったのではな  
いか。

米国行きが本決まりになり、会  
社から支度金をもらい、洋服を何  
着も作り、船の予約もした。盛大  
な送別会もやつてもらい、いざ出  
発というときに、突然中止になっ  
た。当時は外貨割り当てが問題に  
なっており、軍あたりから横やり  
が入ったのではないか。

結局、食い逃げに終わった。支

## 鈴木商店と我が故郷

ダイリ  
大里の回顧

北野浅美

私は北九州市門司区大里（現在  
門司駅のある所）の海岸近くの生  
れで前方は急流渦巻く関門海峡で  
す。叔父達が帝国炭業と帝国汽船  
に勤務知人も鈴木商店街に数人勤  
めておりました。その故かいつの間  
にか子供心にも鈴木商店・金子さ  
んは云うまでもなく柳田さん西川  
さん高畑さんと云う名は覚えてお  
りました。

さて私の故郷大里、明治中期よ  
り鈴木商店が海岸線に沿い北より  
南へ即ち日本塩素、日本酒類・大  
里製粉（日粉）大里製糖（日糖）  
やや離れて帝国麦酒の各工場を設  
けました。地の利を狙っての慧眼  
でせう（私の生家は日糖の近くで  
現存してゐます）この小さな町の  
海岸に鈴木商店の大工場が五ツ並  
んでゐるのも又珍らしいと言えま

度金は洋服に化けてしまつており、  
返せない。

仲間に対しても送別会をやつて  
もらつた手前、体裁が悪かつた。  
私の米国行きも中止になつたが、  
トヨタ、日産、フォードの三社合  
弁構想も、日米関係の雲行きがあ  
やしくなるにつれ、自然消滅して  
しまつた。

現在各工場は社名・系列は変れ  
ども盛業裡に社会や国家に貢献し  
ております。

創業者鈴木商店は消えても、そ  
れ等の工場自体の歴史には必らず  
鈴木商店名が刻み込まれて生きて  
ゐる筈です。同封の「門司工場が  
歩いた五〇年サッポロビール門司  
工場誌」を御覧下さい、鈴木商店  
がサクラビールがハッキリ生きて  
おります。

私、その鈴木商店系の工場群の  
間に生れ、その一つ帝国麦酒に大  
正十五年三月三十日入社（東京勤  
務）しました

翌昭和二年鈴木商店問題発生し  
新入社員は暫らく無く、結局鈴木  
系としては私共が最後でした。

昭和十八年十月当時の大日本麦  
酒に被合併解散・サクラビール最  
後のバランスシートを作つたのも  
何かの縁だつたと思ひます。そし  
て退社しました。在社十八年故郷  
のサクラビール・我が家から十分  
足らず歩いてゆけるサクラビー  
ル、私の脳裡より消える筈はなく  
今も生きております。

「たつみ」第四十一号御恵送頂き  
鈴木商店の記事やサクラビールの

名もあり、同志の内十一名も現在  
辰巳会員であり、同志便りも掲載  
されてゐますので懐かしさ隠し負え  
ず、我が故郷をサクラビールを回  
顧し始めての終りの駄文を弄した  
次第切に御寛恕を仰ぐ次第です  
昭和五十九年十月二十日

### 原稿募集

内容 随想 短歌 俳句 絵画  
詩 写真 鈴木往時の思  
出などを

必ず原稿用紙に縦書で

四百字詰五枚程度

締切 昭和六十年五月末日

送先 神戸市中央区京町七二

太陽鉱工(株)内

「たつみ」編集部宛

## 日銀より鈴木商店に転ず

門室寿人  
(遺稿)

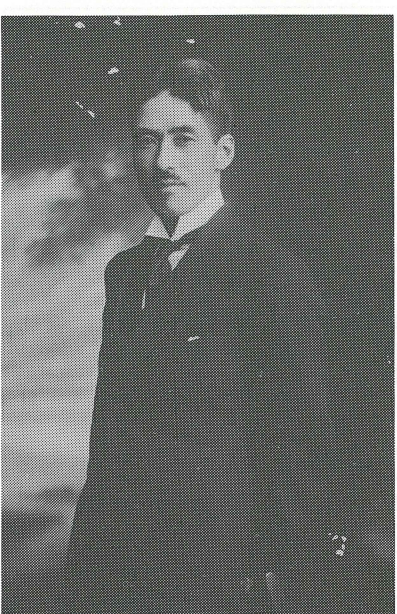
大正六年二月、高畑、永井、亀  
井三氏の同意津村先生の諒解を得  
て神戸鈴木商店に転ず。店内の空  
気は正に元氣横溢にして陰氣の日  
銀に比し昼夜の差あり。

七年前同時に卒業せし連中は皆  
主任級にして多くの部下を指図し  
収入亦何倍かにして得意満面也。  
我輩止むなく小さくなりて店内の  
模様の見学に努む。

免に角亀井君に關係深き鉦山部  
に籍を置き山師達と席を同じうす

れども此の連中は買山のため一度  
出張するや山麓にて酒に浸り談判  
に幾日も費し足跡何処にありや。  
帰神する迄の行動全く不明。豪傑  
連揃にて其の長を阿部元松と云い  
一奇人也。菊池亦酒豪にして行動  
睥睨す不可。丸で無統制、無茶苦  
茶の天地也。併し事業勃興の際は  
如斯元氣なくしては急速間に合わ  
ず或る点迄は大目に見るの外なけ  
ん。

四月に入り岡山県江興味鉦業所



▲ロンドン時代の筆者(大正7年頃)

に出張を  
命ぜらる。  
岡山にて  
中国線に  
乗り換え  
福渡にて  
下車人力  
車にて旭  
川沿いに  
四里半上  
り渡し舟

にて対岸に渡り更に瓜阪上り一里  
半にて高き山間の鉦山事務所に達  
す。神戸を朝早く出発夕方六時頃  
に到着全く不便の山狭にあり。

此の辺今尚寒冷、夜間は真冬同  
様也。之の鉦山は九州人にして岡  
山在住山本と云う山師の名目にて  
買取し未だ鈴木の名義出しあらず。  
その財的看視が我輩に与えられた  
る任務也。初め二週間位の予定な  
りしが遂に九月末迄滞山此の間一  
度報告に帰神せし事あるのみ。

我輩にとりては本店にて不得要  
領るより全々新らしき鉦山生活研  
究は面白く半年の間に得たる感想  
経験苦難は後日の為益せる処多大  
なりき。当時日比に銅精練所を作  
りたるも鉦石は買鉦耳にて是非自  
家銅鉦を獲得し度きため各地に買  
山を試みたるも斯かる泥縄式にて  
果して成功するや疑無き不能。然  
れども銅価の暴騰は放棄したる選  
鉦済の鉦石重選鉦しても計算に合  
うとて買山するに至る。

中国筋には大いなるもの無けれ  
ども小なるもの可なり多し。江興  
味も一時鉦石塊に出合いて前主は  
儲けたる由更に探鉦せば宜い脈に  
当る可しとて買取したるもの其後  
鉦区の拡張をなし大いに有望視ら

れつ、ある時「ロンドン」行き  
交渉を受け下山充分鉦山研究を遂  
げ得ざりしも気分丈けは味い得た  
りと思ふ。

当時「ロンドン」への道は北米  
經由又は印度洋經由の外無くシベ  
リアは途絶えあり。独の無制限潜  
航艇の梁跳せる危険海を犯しての  
赴任は両親妻子ある身の考うべき  
事なれども此の機を逸しては又欧  
米を視るの機無かるべく断然決行  
と決心す。日銀時代より一度欧米  
に行き度きものとの希望ありしも  
到底実現の期なし。一夜三等客と  
なりて太平洋を渡りつ、ある夢を  
見し事ありしが之が正夢となり然  
も一等客として渡洋正に夢心地せ  
ずんば非らず。

当時の江興味鉦山生活は全く原  
始の人間の堪え得る最低生活也。  
而して今進まんとする国の生活は  
最高位のものなり。奈落の底より  
九天の高きに飛躍快哉を叫ばざら  
んと欲するも能はざるなり。然か  
も得意は処するに困難大に警む可  
き処なり。

九月後任者に引継ぎ下山。先づ  
鼻の治療をなしそれより九州北部  
の鈴木關係工場を見学す。九月末  
大暴風あり。九州は平隠なりしが